



分前に24時間開放されているオープンパソコン室に行き、IDカードとパスワードを入力し、自分のメールの受信ファイルを開いた。B君は図書館の返却期限を過ぎた本を持っていたので、返却催促のメッセージが現れ、早急に返却する旨の返事を送った。また、友達からのメールが数通届いていたので、その返事を出し、教室へ向かった。

B君の今日の授業の中には、先生が作られたデジタルビデオによる資料とSCS (Space Collaboration System) からダウンロードされたビデオを使用するものがあり、総合情報処理センター内の教育用パソコン室でそれを見ながら授業が進められた。授業終了後、各学部設置されているオープンパソコン室へ行き、レポート作成に必要な計算を行うとともにワープロ機能を使用してレポートを仕上げた。その後、WWW上で公開されている就職情報を調査し、気分転換にデジタルビデオやCD-ROMで提供されている作品を見た後、帰宅した。

これらは、教官と学生のある1日の例である。このようなキャンパスライフを送ることができるようになるためには、高速・高機能のネットワークシステムと本格的な電子図書館システムが必須条件となることは言うまでもない。

## ネットワークと電子図書館

ネットワークのアーキテクチャは、FDDI、ATM網、Gigabit Ethernetと高速・多機能化し、文字情報から、静止画像、そして動画像が自由に送れるようになってきた。このネットワークの発展が大学における図書館システムに大きな変革をもたらしている。すなわち、ネットワークの無かった時代でのハウスキーピング、ネットワークが普及し始めた頃のOPAC (Online Public Access Catalog)、インターネットの普及による1次情報検索サービス、さらにマルチメディア対応高速ネットワーク回線による電子出版やマルチメディアサービスというように、図書館のサービス内容はネットワークの発展と

もに変化してきた。そして、これからの図書館は、いつでも、誰でも、どこからでも、欲しい情報を簡単に得ることができるように、学術情報の発信の場となる必要がある。すなわち、利用者サービスの拡充、保存機能の充実、検索機能の向上、多種メディアへの対応、快適なレスポンス、デリバリサービス等、研究・教育にトータルソリューションを提供する学術情報発信の基地となることが望まれており、これらを実現できる電子図書館構想が現実のものとなってきつつある。

電子図書館とはdigital libraryとかvirtual libraryと言われており、学術審議会では「電子的情報資料を収集・作成・整理・保存し、ネットワークを介して提供するとともに、外部の情報資源へのアクセスを可能とする機能を持つ物」と定義され、少なくとも、

- ①電子的な手段による全文情報の提供ができること
- ②従来の表題、著者名、少数のキーワードでの検索に加え、本文中の主要な単語をキーワードとした全文検索機能等、高度な情報検索機能を持つこと
- ③電子化された学術情報をネットワークを介して利用可能であること
- ④冊子体、ビデオ、CD-ROM、ネットワーク、SCS等から提供される学術情報を一元的に電子化し、デジタルコンテンツとして継続的に提供できること
- ⑤OPACとの連携を施すなどにより、総合的な図書館活動として位置づけられること等の条件を満たすことが必要であるとされている。さらに、電子化された学術情報を広域ネットワークを介して、実時間に近いかたちで研究室等からいつでも入手できることが望ましいことは言うまでもない。これらの条件は、高速・高性能なコンピュータと高速ネットワークの設置等の処理環境の整備、および電子的全文情報処理技術の開発や操作性の向上等の情報処理技術の進歩により満足されつつある。



## 電子図書館の使命

これからの大学が目指す電子図書館は、市販のCD-ROMやビデオ、電子ジャーナル、サイト契約電子情報の導入、外部電子情報へのアクセス等、社会的成果を大学内へ取り込み、学内に蓄積・配信できる受信型電子図書館と、大学固有の情報資料の学内・学外への発信、大学で所蔵する貴重文献の電子化、学内研究成果の電子化等、大学活動成果を社会に還元できる発信型電子図書館に大別される。前者は、学内の研究・教育活動になくてはならないものであり、後者は、開かれた大学、地域社会に貢献する大学としての当然の義務である。どちらか一方の図書館では不完全であり、両方の性格を有することが情報化社会における大学図書館の使命であると考えられる。これらの使命を遂行するためには、

- ①多様な検索ニーズに応えるデータベースを収容する大容量ファイル、およびそれらのデータベースを高速かつ効率よく検索する検索サーバとその結果を閲覧できる検索クライアント
- ②マルチメディア情報の入力のための各種機器
- ③ビデオ映像、衛星放送、学内で制作する映像作品等の映像情報をデジタル化して蓄積・提供するためのシステム

等が不可欠である。

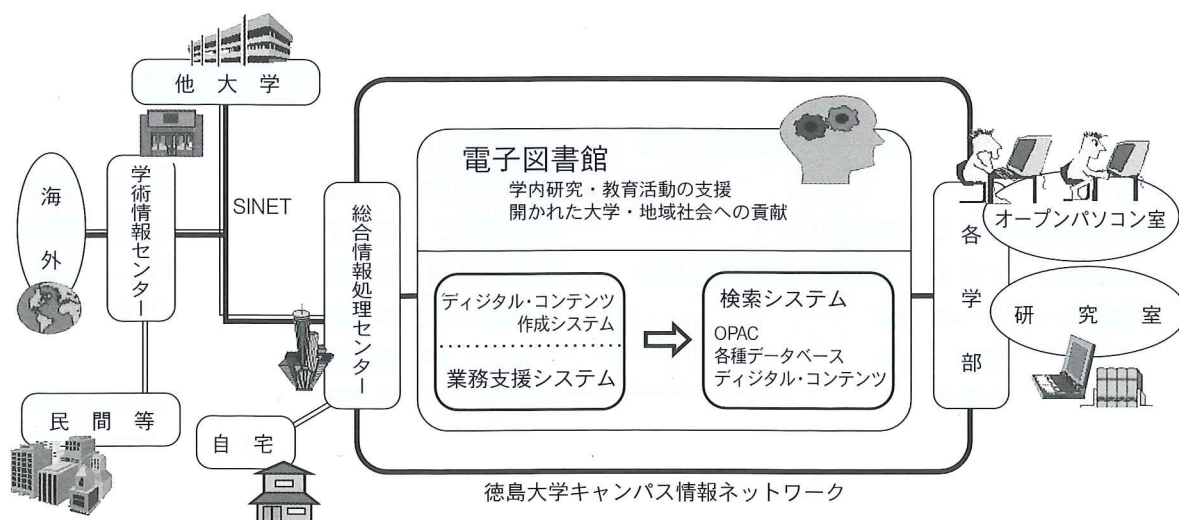
## 徳島大学の現状

ところで、徳島大学の現状に目を向けてみると、残念ながら、遙かに遅れていると言わざるを得ない。現在の徳島大学には、このような条件を満足する電子図書館システム、超高速ネットワーク、およびマルチメディア対応のパソコンを24時間使用可能なオープンパソコン室の設置もできておらず、これらの整備を早急に進めなければならない。すでにこれまでに述べたものに近い電子図書館が運用されている大学もあり、徳島大学においても本格的な電子図書館とその利用環境を整えるため、全学的な検討委員会を早急に設置し、その実現に向けて努力する必要がある。電子図書館構想に関して総合情報処理センターも積極的に協力をさせていただく予定である。そして、本稿冒頭の西暦200X年のXが出来るだけ小さい値になることを祈念しながら、キーインを終えることにする。

本稿を書くにあたり、筑波大学図書館部長（現、図書館情報大学事務局長）森西氏、奈良先端科学技術大学院大学学術情報課長（現、熊本大学情報処理課長）福富正彦氏、および富士通株式会社の資料を参考にさせていただきました。心から厚く御礼申し上げます。

（おおえ しゅんいちろう・

徳島大学総合情報処理センター長 工学部教授）



# 平成10年度附属図書館事業計画について

山 本 久

去る6月3日に開催された第1回附属図書館運営委員会において、平成10年度の附属図書館事業計画が承認されました。この事業計画は当館が取り組むべき当面の課題を列挙したもので、この計画には時間を要する事項、経費を要する事項、直ちに取り組める事項、昨年からの継続事項などがあります。これらの事項の可能なものから取り組んで行きたいと思っています。

この事業計画の達成に向けて、学内の関係者、図書館利用者のご理解を得るため、以下にその主要事項の内容と背景などについて簡単に説明させていただきます。

## 1 附属図書館将来計画の策定

昨年度附属図書館運営委員会の下に将来計画委員会が設置され、図書館の施設、組織、業務、サービスを含む全体的な将来計画をとりまとめることになりました。その将来計画の骨子としては、以下の7項目の目標を取り上げることが適切であるとの結論に達しました。

- ①自動入退館システムの導入による24時間利用可能サービスの実現
- ②図書館を利用した文献情報利用教育のカリキュラム化
- ③学内共通経費による学術雑誌の安定的購入と図書館への集中配置による共同利用の推進
- ④電子図書館サービスの拡充
- ⑤図書館ボランティア（館友）の組織化と図書館サービスへの参画
- ⑥事務組織の再編・整備
- ⑦図書館本館の新営

今年度は以上の各項目につき将来計画を策定します。

## 2 電子図書館的機能の充実・強化

図書館サービス強化のため、昨年に引き続き電子図書館的機能の充実・強化に取り組んでいます。4月には、図書館内にマルチメディア・プラザを設置し、学内情報の発信に取り組んでいます。またこのプラザでは学外の多種多様な情報が瞬時にして収集できます。今年度はこの施設を蔵本分館にも設置します。

また、外部機関が作成した既成の電子情報を導入するだけでなく、本学が所蔵する貴重資料（阿波国絵図・伊能図など）を電子媒体に変換し、画像データベースとしてネットワークを通じて学内外に公開する予定です。

## 3 基本的な図書館資料の整備・充実

図書館では学術雑誌へのアクセスの拡大を図るため図書館への集中化を推進しています。10月末日現在で、常三島地区で326誌（全体の23.7%）、蔵本地区で611誌（全体の55%）の雑誌を集中化し、図書館で自由に閲覧できます。

昨年度にひきつづき、今年度以降も維持・拡大されるようご協力をお願いします。

## 4 施設、設備、サービスの改善

老朽化した椅子、机、視聴覚機器等の更新を図るとともに、三階の留学生コーナー、新聞雑誌閲覧室、ブラウジングコーナー、二階雑誌閲覧室のスペース利用計画等を見直し、より快適で利用しやすい環境の整備をめざします。

また、身体障害者に対しては、視覚障害者のためのパソコンや聴覚障害者のための電子機器等の新たな導入を図り、サービス体制の充実を図る必要があります。





## 5 情報リテラシー教育の推進（図書館と教育カリキュラムとの連携）

我が国の大学では、学部と大学院のカリキュラムの中で、学習・研究テーマについて、図書館等にある各種の文献、資料やその他の情報検索ツールを駆使して系統的に情報を収集、加工し、自らの考察を加えて一つのレポート、論文等に纏め上げるための、いわゆる「知の技法」もしくは「情報リテラシー」に関する組織的、系統的な教育が十分に行われているとは言い難い。

本学では、学部、学科の学生を対象として文献検索指導を含む図書館利用ガイダンスにとどまっています。今後はその内容を充実し、範囲をさらに拡大して、関係部局と連携・協力をして正規のカリキュラム化を図り、情報リテラシー教育の推進を検討していきたいと考えています。

## 6 大学図書館の公開、市民との連携の強化

本学では生涯学習の一環として、地域社会へ公開しています。一般市民等学外者の利用も年々増加の傾向にあります。

今年度からは、従来の手続きを改め、図書館利用の申請と貸出手続きを簡素化し、利用の便宜を図っています。さらに、今後は大学図書館を理解してもらうことを考え、図書館のサービスと運営の特定分野を活動の場として提供し、市民等による図書館ボランティアを導入して、市民等との連携の強化を深めていきたいと考えています。

## 7 業務の改善・合理化

事務の専門化、高度化が求められている中で、9次にわたる定員削減、行革に伴う削減等が実施されている現実を踏まえ、事務の重複を排除し、簡素化、合理化を図り「限られた人員で最大の効果」が発揮できる体制が望まれています。

図書館では、業務の改善・合理化を図るため、

コンピュータによる業務処理システムをさらに改善し、また組織の見直しに取り組み、利用者へのサービスが低下しないように業務の改善・合理化に取り組んでいきたいと考えています。

## 8 その他

- (1) 開館サービスは、現在、本館・分館とも朝9時から夜9時まで開館しています。学生休業日と土曜日は開館時間を短縮して開館していますが、日曜日は開館していません。

「24時間いつでも利用できる図書館」というのが開館サービスの理想と思いますので、将来は、日曜日開館と開館していない時でも研究者が緊急の利用を必要とする場合、いつでも利用できるように、IDカードによる自動入退館システム、夜間入室システム等を導入し、24時間利用可能な図書館をめざしたいと思っています。時代の流れとして、特に医科系の図書館では、全国的に24時間利用可能な体制へと進んでいます。体制の整備に要する経費など大きな問題もありますが、蔵本分館もこの流れをいつまでも傍観しておくわけにはいかないと思います。

- (2) 学術情報の現状と図書館の役割について学内外の理解と関心を高めるため、この分野の学識経験者を招いて「学術情報に関する講演会」を開催します。

## 9 おわりに

図書館は「大学の泉、大学の心臓」とよく呼ばれますが、蔵書構成、利用者サービス等諸々の機能を図書館が十分果たしていればあながち僭称とはいえないと思っています。「大学の泉、大学の心臓」と呼ばれても恥ずかしくない図書館をめざして、本年度の事業に積極的に取り組んで参ります。

利用者及び関係各位のご支援、ご協力を重ねてお願いする次第です。

(やまもと・ひさし 附属図書館事務部長)



## 附属図書館整備・改善の歩み

区 分	実 施 経 過	
	～昭和63年度	平成元年度～平成5年度
組織・機構	図書館組織一元化(昭27) 附属図書館運営委員会設置(昭33) 本館事務組織改組(昭34, 43, 55) 蔵本分館運営委員会設置(昭43) 常三島分館を本館に統合(昭43) 蔵本分館事務組織改組(昭53, 55, 58) 図書館専門員設置(昭59)	事務組織改組(平2) 部課制設置(平3) 附属図書館事務組織改組(平4)
図 書 館	夜間開館開始(昭37) 図書館報創刊(昭39) MLニュース創刊(分館:昭41) 附属図書館概要刊行(本館:昭50) 図書館利用案内刊行(本館:昭51) 図書館報「すだち」に名称変更(昭63)	土曜開館実施(平4) 英文利用案内作成(平5)
	学習 指定図書制度実施(昭43)	共通教育選書計画策定(平4)
機 能	研究 文献複写サービス開始(本館:昭34, 分館:昭26) テレックス導入(分館:昭45) 情報検索サービス開始 JOIS(分館:昭56) DIALOG(本館, 分館:昭57)	情報検索サービス開始:JOIS(本館:平2) 大型コレクション整備(平3) ILLシステムによるサービス開始(平4) ファクシミリ文献複写サービス開始(平4) 大型コレクション整備(平5)
	保存 古文献保存(補修・マイクロ化)(昭55)	
事 業	情報処理センター電算化により閲覧業務オンライン化(昭59)	図書館専用電算機導入(平2) 学術情報センター接続(平2) O P A C運用開始(平3) CD-ROMによる情報検索サービス開始(平5) 情報検索ガイダンス(分館)(平3～)
	電子	
施 設 ・ 設 備	日本近代文学展(本館:昭53) 日本現代地図展(本館:昭54) 文献検索指導(薬学部)(分館:昭54) 医学・薬学古書文献展(分館:昭55) 近世阿波の史料展(本館:昭56) 地震展(本館:昭57) 復刻本の展覧(本館:昭60) ライフサイエンス関係文献解説集(分館:昭61)	郷土資料目録(本館:平1) 泉山文庫目録改訂版(本館:平2) 学術情報に関する講演会(平3) 学術情報センター地域講習会開催:目録システム(平4～5) 学術情報センター地域講習会開催:NACSIS・IR(平5) 国立大学図書館協議会総会開催(平5)
	蔵本分館書庫新築(昭37) 蔵本分館事務室新築(昭38) 本館新営(昭46) 本館書庫増設(昭53) 蔵本分館増築(昭54) 本館改築(昭60) 蔵本分館 BDS 設置(昭61)	本館 BDS 設置(平4) 情報検索コーナー設置(平5) 留学生資料コーナー設置(平5)
要員研修	大学図書館職員長期研修受講(～昭56)6名 図書館職員等著作権実務講習会(昭58～平1)9名 学術情報センターシンポジウム(昭60～61)3名 東京大学図書館情報学セミナー(昭49～57)5名 学術情報センタータスクフォース(昭60)1名	目録システム担当要員養成研修(平1～5)13名 大学図書館職員長期研修受講(平2～6)3名 総合目録データベース実務研修(平3～5)3名 情報検索システム担当要員養成研修(平5～6)23名
規定・その他	本館利用細則取扱要領(昭59実施) 蔵本分館利用細則取扱要領(昭62実施)	資料不用決定取扱基準(平1決定)



実 施 経 過		今 後 の 課 題
平成6年度～平成8年度	平成9年度～平成10年度	
館報編集委員会(平6) 附属図書館図書選定委員会(平6) 蔵本分館図書選定委員会(平8)	附属図書館将来計画検討委員会の設置(平9)	事務組織の改編 研究開発室の設置
MLニュースを速報版に変更(平6) 学外者利用案内刊行(平6) 本館夜間開館時間延長(平6) 自己点検評価報告書刊行(平7) 蔵本分館試験期夜間開館時間延長(平7)	Library Announcement(すだちの速報版)創刊(平9) 館報の刷新(平9) 本館書庫入庫制限の変更(平9) 特別貸出(教室貸出)方式の変更(平9) 図書館学外者利用申請の変更(平9) 図書館利用案内の刷新(平9) 学報掲載の統計情報リメイク(平10) 夜間開館時間の通年延長(分館:平10) 図書館将来計画の策定(平10)	ボランティアの導入 情報リテラシー教育の実施 インターネットを介した広報活動の推進 夜間開館の通年延長(分館) 日曜開館の推進 24時間開館(分館)
	学生用図書購入計画見直し(平9)	
ILLシステムによるBLDSCサービス開始(平6) 自然科学系特別図書整備(平7) 大型コレクション整備(平7)	自然科学系特別図書整備(平9)	学術雑誌共同利用の推進 共同利用研究資料の整備 大型コレクションの整備 自然科学系特別図書の整備 電子体二次資料の充実
		収蔵スペースの確保 貴重資料の補修
CD-ROM ネットワークサービス開始(平6) 図書館専用電算機の更新(平6) UNIX版OPAC(TELNET)運用開始(平6) UNIX版CD-ROMサーバシステム(ERL)導入(平7) 電子メールによるILL申込受付(平7) 電子掲示板設置(平7) UNIX版図書館トータルシステム導入(平8) WWWブラウザによるOPAC運用開始(平8)	絵図の画像データベース化(平9～) 図書館ホームページの開設(平9) CAサーバシステムの導入(平9) 電子掲示板の活用(平9) ID変換ソフト開発(平10) CA on CD, Cl on CD ネットワークサービス開始(平10) 無料電子ジャーナルのサービス開始(平10) ERL(Current Contents, MEDLINE)検索講習会(平9) C A、医中誌検索講習会(平10) 人文社会系情報検索講習会(平10) 視聴覚ライブラリーシステムの導入(平10)	貴重資料の電子化 電子メディア利用指導の強化 OPACデータの整備 学術情報センター新CAT/ILLへの対応 ネットワーク情報サービスの充実 ホームページの充実 図書館システム更新
学術情報センター地域講習会開催: NACSIS-IR(平6)	学術情報センター地域講習会開催: ILLシステム(平10) 資料ID変換及びラベル貼付作業(平10～)	資料展示会の開催 目録データ週及入力
身障者用設備の整備(平6) 蔵本分館増改築(平6) 蔵本分館電動集密書架設置(平6) サイン整備(平7) 参考書架増設(平7) 蔵本分館BDS更新(平7) 学術雑誌閲覧室設置(平8) 本館ブリペイドカード方式複写機導入(平成8)	サービスカウンターの更新(本館:平9) 身障者用机増設(本館:平9) 図書自動貸出・返却装置の導入(平9) 閲覧室椅子の更新(平9, 10) マルチメディア・プラザの設置(平9) マルチメディア・コーナーの設置(分館:平10) 特殊資料閲覧室・展示室設置(平10)	利用者用端末機の増設 閲覧室机・椅子等の更新 雑誌閲覧室の整備 新図書館の建築計画 視聴覚機器の整備 利用スペースの見直し O C S 端末機の増設
図書館等職員著作権実務講習会(平7)8名	大学図書館職員短期研修受講(平9～10)2名 図書館職員等著作権実務講習会(平9～10)2名	研修会等の受講推進
図書選定委員会規約(平6, 8制定) 蔵本分館図書選定委員会規約(平7伺定)	貴重資料指定基準・取扱要領(平9裁定)	

# 徳島のあけぼのをさぐる

—蔵本キャンパス内遺跡調査から—

中 村 豊

現在常三島・蔵本両キャンパスともさかんに校舎の新築工事がおこなわれていることは、すでにみなさんご存じのことと思います。そうしたなかで、遺跡の発掘調査がおこなわれているのをかいまみたかたもおられるのではないのでしょうか。より快適な生活環境へとすすむなか、なぜ発掘調査などしなければならないのでしょうか。

「歴史は繰り返す」ということわざがありますが、実際歴史をふりかえると、わたしたちは幾度となくおなじようなことを繰り返かえています。残念ながら、よいことばかりではなく、戦争や差別といった負の側面もあったことは否定できません。そして、負の歴史を繰り返してしまうということは、過去を正確にふりかえることができているからではないのでしょうか。つまり、過去の歴史をさぐるということは決して後ろ向きの思考ではなく、わたしたちの将来に活かすための営為なのです。遺跡の発掘調査がおこなわれるのも、たんに宝探しのためや、法律で決まっているからではなくて、未来に役立つ余地があるからにほかなりません。それでは、蔵本キャンパス内の発掘調査から過去の歴史を探ることにしましょう。

日本列島における長い歴史において、弥生時代（約前400～後300年）のはじまりは、おそらくもっとも大きな変革のひとつであったことでしょう。はじめて農業を本格的な経済基盤とする社会が生まれ、貧富の差が決定的なものとなり、それらが今日まで続く国家の基礎となったからです。

弥生時代は前・中・後の3期に分けられていますが、蔵本キャンパスの地下に眠る庄・蔵本遺跡（写真）は、弥生時代前期（約前400～前

200年前）に営まれた集落で、遺跡の規模、出土品の量とも県下最大規模を誇ります。

1996年の調査で、キャンパスの南東隅、現在の看護婦宿舎近辺で弧状にめぐらされた2重の大規模な濠を検出しました。外側の濠は上面幅約3.5m、深さ約1.5mであり、内側の濠（写真）は上面幅約2m・深さ約1.3mです。写真をみていただければわかるように、左右の壁面が急激な角度で掘られているので、一度落ちると自力ではいあがるのは非常に困難です。また、内濠の内側に柵をめぐらせていた痕跡も確認しており、防御的な機能を備えていたことがうかがえます。濠の内側からは、木でできた農工具や石斧・石庖丁といった石器類の作りかけのものが出土しています。また大学のすぐ南の地点で、徳島市教育委員会によって同じ時期の竪穴住居のあとが発見されているので、付近一帯が「環濠集落」であったことが判明しました。

「環濠集落」の姿が明らかとなる10年前の1986年、キャンパスの南西隅、現在の青藍会館のあるところで集落とほぼ同じ頃の墓場のあとがみつかっていました。そのうちのひとつから、8個の石でできた矢尻（矢の先端部分）が出てきました。人骨は残っていなかったため確認はできませんが、もし8本の弓矢が打ち込まれたというのなら、戦いの犠牲者ということになります。

環濠・柵によって嚴重に防御されたむら、戦いによる犠牲者の存在は、当時の緊張状態を雄弁に物語っています。従来、土地と富をめぐる争いは、稲作農耕が安定し、蓄えが増え始めた弥生時代中期（約前200～紀元前後頃）に激化すると考えられてきましたが、弥生時代がはじまってすぐに、早くも展開されていたのです。



蔵本キャンパスから東に800mほどのところに赤いレンガ造りの佐古浄水場があることはみなさんご存じではないでしょうか。そこは、三谷遺跡といって、最後の縄文の村が営まれたところでもあります。1990年の徳島市教育委員会の調査で多くの遺物がみつかりました。7体もの犬が埋葬されており当時の墓場だったことがわかります。ところがこれからは血なまぐさい痕跡は確認できません。この両者の対照的な違いは何を意味するのでしょうか。環濠は防衛としての機能とともに自他を明確に区別する思想の表れでもあります。弥生時代がはじまったころ、新しい文物・技術とともに、潜在的な他を敵視する意識、自他を区別する意識も伝わったと考えられるのです。こうした意識はやがて、戦争や差別へと発展していったのではないのでしょうか。

縄文時代から弥生時代への変革は、現代につながる多くの文化・技術をもたらしました。しかしながら、上でみたような負の側面もあったのです。今日なお戦争や差別に苦しむ人びとが

多数存在します。そして、我が国も決して例外ではありません。歴史は必ずしも進歩するばかりではありません。しかし、この負の側面に目をむけることによって、これからの時代にどのように対処するのかのヒントをみつけることができるかもしれません。便利で快適な生活は、こうした歴史の重み、積み重ねの上に建っているのだということを常に意識しておきたいと思えます。

以上のような成果は、私たち研究者だけが知っていてもあまり意味はありません。残念なことですが、今まで、構内の発掘調査の成果を積極的に市民に広める機会はありませんでした。たとえば今年度は、春の大学開放実践センター公開講座「川と人間」や四国地区大学放送公開講座のラジオ講座「川と人間」で若干報告したくらいです。成果をどのようにして多くの人々に知ってもらうか、またそのためにどのような機会を設けるかは、今後の大きな課題といえるでしょう。

(なかむら ゆたか・大学開放実践センター助手)



◀ 眉山より庄・蔵本遺跡をのぞむ



内側の濠 ▶

## CA on CD を 待ちわびた日

河村 保彦

もう一年以上も前になるでしょうか。学科の教室会議で、CA (Chemical Abstracts) および CI (Collective Index) のデータ・ベースの予算がついた、という図書委員の先生のお話を伺った時のうれしさは今も忘れられません。私は有機化学の分野で仕事をしておりますが、文献調査は日常欠かすことのできない作業です。その意味でまさに CA、CI は心強い味方といえます。ともすれば体力勝負の実験の毎日、文献調査もその延長線上にあり、常三島から蔵本地区の図書館へ出かけることも厭うことはありません。しかしその都度、何時間かはその作業に時間が費やされてしまうのに、諦めにも似た心境を抱いておりました。外国にしばらく滞在したおり、図書館に出向く必要はありましたが、ネットワーク文献検索、四六時中あいている閲覧室、みたい本なら洋の東西を問わず何でも探せばある書棚と、その頃としては夢のような経験をすることができました。研究・教育のセンターとして大学はかくあるべき、といった私のイメージの一端が、そんなところからも醸成されてきているかも知れません。

先の図書委員の先生のアナウンスから、私はサンタさんを待ちわびる子供のように、自室のパソコンから存分に CA、CI をサーフィンできる毎日を楽しみにしてきました。その間多くの方々のご尽力でとうとうその日がやってきました。私共の研究室では某リンゴ印パソコンを使用している関係で多少時間はかかりましたが、今や大いに有効利用させていただいています。サーバーがたまにダウンすることもあります。しかしその都度、図書館の方々の迅速なご対応には本当に頭の下がる思いであります。さあ、ネットワークによる文献検索で空いた時間で、もうひと仕事しましょうか。

(かわむら やすひこ・工学部助教授)

## 学生による学生のための CA on CD の利用の仕方

新谷 幸弘

CA とは Chemical Abstracts の略で、化学系を中心に幅広い科学技術分野を含む論文索引である。情報量が多く、データ更新も早いので理科系の学生が最もよく利用している索引の一つである。しかしその情報量の多さが仇となり、これまでは欲しい論文を探すためには分厚い冊子体を何冊もひっくり返さなくてはならなかった。私も検索初心者の頃は、丸一日図書館にこもりっきりになることも多かった。

図書館は今年4月から CA のオンラインサービスを始めた。このサービスによって CA 検索は以前と比べて格段に速くなり、更には図書館に行かなくても研究室で24時間論文検索が出来るようになった。欲しい論文が見つかると、その論文が本学図書館にあるかどうかは図書館ホームページで検索でき、もし無ければ電子メールや図書館にある申込用紙で学外文献複写の申込みができる。更に身近にインターネットを使えるパソコンがなくても、図書館利用証があれば、図書館のマルチメディアプラザにあるパソコンを使って情報検索ができる。私はこのサービスで欲しい論文をたくさん見つけることができ、(論文はあまり読んでないくせに) 少し賢くなったような気がしている。

自分の研究テーマと関連のある論文を検索することはとても重要で、その時にひいた論文は後で自分の研究や卒業、修士論文作成の際に大いに役立つ。またこれからの情報化社会を担う我々は、電子化された情報の扱い方について早く慣れておくことが大切である。そのためにも図書館のマルチメディアプラザを上手に利用することをお薦めする。でも利用する時には、他の人の迷惑にならないよう気をつけることも忘れないでほしいな。

(しんたに ゆきひろ・)

総合科学部 人間・自然環境研究科 修士課程2年)



## 本館ユーザ・インストラクションについて

岡田 恵子

徳島大学附属図書館では平成9年度から Current Contents を自然科学系理工学系5部門に増やし、また、今年度から Chemical Abstracts (CA on CD、CI on CD) のネットワーク検索の提供を始めました。本年4月17日からはマルチメディア・プラザにインターネットの使えるパソコンを10台備え利用に供しています。

これらの諸事情をふまえ、Current Contents は昨年、Chemical Abstracts は春期に講習会を行いました。秋には初の試みとして、10月19日から23日までの間、人文社会科学系を対象に講習を開催しました。単体CD-ROMの使い方を中心に、インターネットで使えるデータベースも加味して次の3種類各2回ずつを、プロジェクターでパソコンの画面をスクリーンに映して行いました。

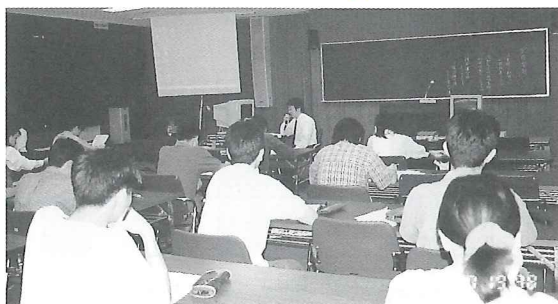
講習1：学術論文・図書を調べる（国内編）

講習2：一般雑誌・新聞の記事を調べる

講習3：学外文献の申し込み方法

参加者はのべ80名になりました。講習後のアンケート調査によると利用者からの反応はおおむね好評でした。回答者からは、

- ・卒論のテーマを決める時期に合わせて開催してほしい
- ・実際に練習してみたかった
- ・詳細な部分まで教えていただけるので非常に有益であったように思います
- ・できればもう少し回数を増やして欲しい
- ・こういった機会は利用していくうえでけっこう有益だと思うのでもっと利用できる機会を増やしてほしいなどの意見が寄せられました。



実習については総合情報処理センターとの連携が必要です。また、学術情報係では参考業務、文献複写、相互貸借、図書館システムの管理、マルチメディア・プラザの管理、CA on CD、CC、MEDLINE の管理、ホームページの管理、館報「すだち」の発行等、多岐に渡る業務を受け持っているため、利用者の要望に答えるためには、電子情報サービスを扱う専門の係の設置なども検討する必要があります。

大学生活の大きな意味の一つは「調査・研究に必要な情報を得る力をつける」ことにあるといわれます。そのためには図書館を調査・研究に必要な情報を検索・入手する場として活用することが重要です。そのために図書館は何をすることができるかが問われているといえます。

最近ではすでにパソコンを使いこなしている学生も多いと思いますが、そうでない新入生向けのコマの用意も必要です。そこで今後は、

・マルチメディア・プラザの使い方

・図書・雑誌を探す

学内・他大学 OPAC 国立国会図書館

British Library Library of Congress 等

・論文を探す

・Current Contents(CC) の検索

・Chemical Abstracts ネットワーク検索

・MEDLINE の検索

・単体 CD-ROM の上手な使い方

CD-HIASK、雑誌記事索引

CD-MAGAZINE 等

・WWW 上で使えるデータベース

・冊子体参考資料の紹介

等の年間計画を検討しています。

他大学では、授業に組み込んで講義と実習をしたり、また通常の授業の中で受講できるような講習会などの工夫がなされているところが増えてきています。本学でもその方向を模索しつつあります。

(おかだ けいこ・学術情報係長)

# 図書館書架スペースの現状と課題

吉田 敬治

## 本館の現状

徳島大学附属図書館は常三島地区に本館、蔵本地区に分館があり、それぞれ特色を生かした蔵書構成となっている。本館は昭和46年に新営、昭和53年に書庫増設、昭和60年に増改築(延5,342㎡)が行われた。

本館の蔵書数は約558,000冊で、本館所蔵分が約412,000冊、研究室への貸出分が約146,000冊である。所蔵数の7割が図書で、新規受入図書は2階、3階の開架閲覧室に配架し、古くなった図書や研究室から図書館へ返納された図書は1階の移動式書架に配架されて利用に供されている。

図のように研究室返納分は年間約8,000冊程あり、図書館受入分と合わせて約14,000冊が1年間に増加していることになる。そのため図書の分野によっては、ほぼ満杯状態の棚がたくさん見られる。

図書館資料の3割は雑誌で5層ある書庫、学術閲覧室に配架されている。雑誌も図書同様ほぼ満杯の状態である。本館では表に示したように、4～5年先には図書館全体の書架スペースが満杯となる見通しである。

本館書架スペースの現状

	収容可能冊数 (棚数)	配架冊数	年間増加 予想冊数	書架の 空棚状態
2階開架閲覧室	31,000冊 (1,032棚)	32,900冊	1,600冊 (53棚)	満杯状態
3階開架閲覧室	29,300冊 (981棚)	31,400冊	2,400冊 (80棚)	満杯状態
その他閲覧室	33,600冊 (1,345棚)	26,700冊	600冊 (30棚)	空棚少々
1階集密書庫	215,400冊 (8,616棚)	172,000冊	8,400冊 (280棚)	空棚少々
書庫(1～5層)	180,300冊 (7,161棚)	149,000冊	1,000冊 (50棚)	空棚少々
合計	489,600冊 (19,135棚)	412,000冊	14,000冊 (340棚)	

## 蔵本分館の現状

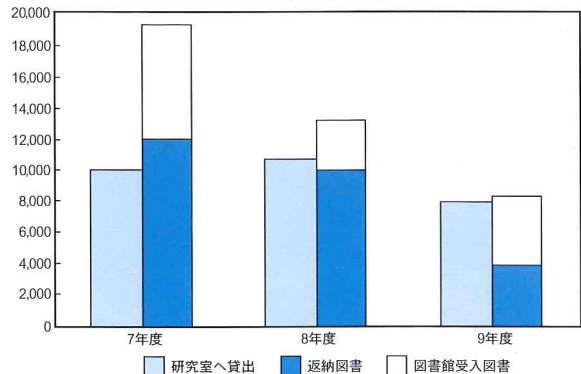
蔵本分館は昭和54年に増築、平成6年に増改築(延3,107㎡)が行われ、主にライフサイエンス系の学術雑誌を分館に集中化する収書方針が採られている。分館の所蔵資料144,000冊のうち、学術雑誌が約6割を占め、国内雑誌書庫に25,000冊、外国雑誌書庫に62,000冊所蔵している。今後も購読雑誌が製本され書庫に配架されるので、約5～6年先には雑誌の書庫は満杯となる見通しである。また、1階の電動書架は設置後4年余りで、多数の棚が蔵本地区の講座からの返納資料で占められている。

## 今後の課題

このような書架の現状に対し、図書館では年々利用スペースの見直しを行い、書架の増設、不用図書の廃棄等により対処しているが、数年先には資料の別置による分散化等を余儀なくされ、図書を探し出すことが困難な状況になることが予測される。利用者サービスの低下を招くこととなるので、早急に抜本的な対策を講じることが求められている。

(よしだ けいじ・情報サービス係長)

本館増加図書の内訳





## ちようりゆう

自然科学・工学系のための  
情報検索講習会開催

5月20日(水)図書館において、専門インストラクターを招いての情報検索講習会を開催しました。本館大視聴覚室で1コマ、蔵本分館会議室で2コマ行われました。医学中央雑誌 CD-ROM 版、CA on CD、そのほかインターネットで検索できるデータベース等が紹介されました。工学部28名、医学部16名、薬学部13名その他総勢で85名の参加者がありました。大変好評でコマを増やしてほしいとの要望も出されました。

また春期には OPAC 講習会も開催しました。

電子ジャーナル (Full Text)  
無料サービス開始

現在、インターネットを通じて多くの学術雑誌が電子的に提供されています。Contents(目次)や Abstracts(抄録)は、多くの出版社が無料で特別な手続きなしで提供していますが、Full Text(全文)は、無料試行期間(free trial period)を過ぎると、一定の手続きを済ませた冊子体購読者のみに限定する雑誌が多くなっています。

そこで、図書館で購読している雑誌で Full Text が提供されているものについて、図書館のホームページに「電子ジャーナル」の項目を設けてリンクをしました。ぜひご利用ください。なお、図書館では購読していませんが、無料試行期間中のいくつかの雑誌も加えてありますので、あわせてご利用ください。11月17日現在、173タイトルを掲載中です。

問い合わせ先：図書館情報管理課雑誌情報係

内線 常三島地区 6122

古絵図の高精度画像データベース  
－科学研究費による取組み－

本学では昨年度から阿波・淡路国絵図等の古絵図の高精度画像化を進めていましたが、今年度科学研究費が配分され伊能図や国絵図類の調査と画像化の作業がすすめられています。大型絵図にかかれた1mmの大きさの文字も読める高精度の画像の作成をめざしています。

CC、CA on CD ネットワーク検索  
全学的利用

当館では Current Contents (CC) 自然科学系・工学系5部門のネットワーク検索を平成9年度から、また今年度より Chemical Abstracts (CA on CD, CI on CD) のネットワーク検索サービスを開始しました。教室/講座単位での受付を行っていますが、申し込み状況は下の表のように全学で利用されています。

学 部	CC		CA on CD
	平 10	平 11	平 10
総合科学部	8	10	10
工学部	22	20	25
大学開放実践センター			
保健管理センター	1	1	
総合情報処理センター			1
地域共同研究センター			
常三島地区計	31	31	36
医学部	26	22	26
医学部附属病院			2
歯学部	10	9	11
歯学部附属病院	1	1	1
薬学部	10	8	13
分子酵素学研究センター	4	4	6
医療技術短期大学部	3	2	4
蔵本地区計	54	46	63
総 計	85	77	99



## ILLシステム地域講習会開催

平成10年8月6日(木)～7日(金)の2日間、学術情報センターと本学附属図書館との共催で標記の講習会が開催されました。ILL業務を担当している図書館職員を対象とし、学術情報センターのILLシステムの運用方法とシステム操作に関する知識・技術を習得するための講習会です。はるばる宮崎からの参加者も含め10名が受講しました。初めてILLシステムを操作する受講生も、かなり習熟した受講生も一緒になって熱心に受講しました。

## 人文・社会科学系のための 検索講習会開催(10月)

10月19～23日に3種類の検索講習会を行いました。今回は人文・社会科学を中心に単体CD-ROMの使い方を3種類の講習会にし、それぞれ2コマずつ計6コマ行われました。総合科学部3年生を中心にのべ80名の参加がありました。詳細は本文をごらんください。

## 図書館ホームページの トップページを更新

ホームページの掲載事項の増加により、トップページが1画面で見えなくなりました。そこで、フレーム化して、より利用しやすいものになりました。

## 資料ID変換ソフト開発

本学では平成8年度までに登録した図書資料のIDラベルをOCRからバーコードに変換するソフトを開発し、インストールを終了しました。ハンディターミナルを使って、書架の図書を随時読み取らせ、登録データをチェックしてバーコードラベルをプリントアウトできるようにしました。これにより資料を端末機のところまで運ぶ必要がなくなり、バーコードラベルの添付作業がやりやすくなりました。現在、ラベルの貼付作業計画が進められています。

## 自動貸出(PSC)・返却装置稼働開始

PSCはユーザ自身がディスプレイに表示されるメッセージとイラストに従って簡単に貸出手続きを行える装置です。返却装置は職員用で処理が簡便化されました。バーコードラベル貼付図書はこれで貸出処理ができます。ユーザにも好評で、効果を発揮しています。

## 新着雑誌コーナーのリメイク

平成10年8月より本館学術雑誌閲覧室(2F)に新着の学術雑誌をすべて展示できる書架を備え付けました。利用者からはわかりやすくなったと好評です。

## 特殊資料閲覧室の新設

平成10年10月、本館学術資料室の中に特殊資料閲覧室と展示室が新たに設けられました。附属図書館が所蔵する古絵図、古文書、和書漢籍等の貴重書の調査閲覧等に活用されています。

## 蔵本分館

### カラーコピーサービス開始

研究者多数の要望により、平成10年5月12日より、カラーコピーサービスを実施しています。10月末現在、1,410枚利用されています。なお、OHP用紙で複写される方は、富士ゼロックス用の用紙を用意の上、ご利用ください。

## 医療短大オリエンテーション実施

平成9年度から、看護学科2年生に対し看護学概論の一環として、文献情報検索を図書館で指導することになりました。今年度も10年11月9日(月)9:00～12:00まで、81名を対象に、文献情報検索の目的(論文・報告書の作成方法等)と、医学中央雑誌を中心として、MEDLINE CCOD/A, OPACの検索方法の説明と実習を実施しました。説明はセミナー室で、また、実習は3班に分け、27名が5台の端末を使用して行いました。



## 本学教官著作寄贈図書

寄贈者	著者名	書名	寄贈者	著者名	書名
河野 清	河野 清	コンクリート研究室とともに31年	村上光太郎	村上光太郎	よく効く民間薬 100
大西 克成	大西 克成 他	エッセンシャル微生物学 第4版	大島 敏久	大島 敏久	酵素のおはなし
藤岡 英雄	藤岡 英雄	生涯学習需要の構造と大学開放:徳島県における実証的研究	高杉 益充	高杉 益充	過量注意薬剤と処置
村上 仁士	村上 仁士 他	環境工学:これからの都市環境とその創造のために	高杉 益充	高杉 益充	病院薬局実務大系
			高杉 益充	高杉 益充	薬効別医薬品の適正使用指針'98-'99

## 人 事 異 動

平 9. 8. 1

附属図書館蔵本分館長

石 村 和 敬

平 10. 3. 31

退 職

元 山 光 代 (情報管理課図書館専門員)

退 職

吉 崎 智 子

大 塚 裕 美

辻 理 恵

(情報サービス課分館情報サービス係)

平 10. 4. 1

横浜国立大学附属図書館事務部長

坂 上 光 明 (徳島大学附属図書館事務部長)

徳島大学附属図書館事務部長

山 本 久

(長崎大学附属図書館情報管理課長)

熊本大学附属図書館情報管理課長

高 塩 勝 也

(徳島大学附属図書館情報管理課長)

徳島大学附属図書館情報管理課長

安 永 勉

(京都大学附属図書館情報サービス課長)

鳴門教育大学教務部図書課情報サービス係

揚 野 敏 光 (情報管理課図書情報係)

総合情報処理センター

庫 元 孝 文 (情報サービス課学術情報係)

情報管理課図書館専門員

上 田 智 一 (情報管理課図書情報係長)

情報サービス課情報サービス係長

吉 田 敬 治

(情報サービス課分館情報サービス係長)

情報サービス課分館情報サービス係長

櫻 木 強

(情報サービス課分館情報調査係長)

情報サービス課分館情報調査係長

近 藤 英 子

(情報サービス課情報サービス係長)

附属図書館情報管理課図書情報係

原 田 直 樹 (経理部経理課出納係)

情報サービス課学術情報係

前 田 朋 彦

(鳴門教育大学教務部図書課情報サービス係)

情報管理課図書情報係

藤 井 佳 代

(情報サービス課分館情報サービス係)

情報管理課分館資料情報係

清 重 潤 子 (情報サービス課学術情報係)

附属図書館情報サービス課学術情報係

中 島 孝 子 (情報管理課分館資料情報係)

情報サービス課分館情報サービス係

真 鍋 佳 子 (情報管理課図書情報係)

情報管理課図書情報係長 (併任)

上 田 智 一 (情報管理課図書館専門員)

採用 (情報サービス課分館情報サービス係)

滝 下 順 子

長 谷 川 明 子

篠 原 亜 耶 子

採用 (情報管理課雑誌情報係)

大 塚 裕 美

平 10. 10. 1

薬学部庶務係

明 石 賞 美 (情報管理課総務係)

情報管理課図書情報係主任

原 田 直 樹 (情報管理課図書情報係)

情報管理課総務係

中 川 志 津 子 (工学部学生係)

退 職

大 塚 裕 美 (情報管理課雑誌情報係)

職場に復帰した (情報管理課雑誌情報係)

日 高 奈 三 江

平 10. 11. 1

分館学術情報専門員 (併任)

櫻 木 強

(情報サービス課分館情報サービス係長)



## 会 議



### ●学 内

6. 3 第1回附属図書館運営委員会  
 ・平成10年度事業計画  
 ・平成10年度附属図書館運営費所要見込額(案)について  
 ・各種委員会委員の選出について  
 ・大型コレクション等の要求について
7. 1 第2回附属図書館運営委員会  
 ・平成10年度学用図書購入費等の配分(案)について

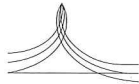
9. 25 消耗品扱いの研究図書について  
 館報編集委員会
10. 12 第3回附属図書館運営委員会  
 ・学内設備充実費の配分(案)について  
 ・附属図書館長候補者の日程(案)及び附属図書館長候補者の投票方法について

### ●学 外

5. 20~21 第69回日本医学図書館協会総会(於:自治医科大学)  
 石村和敬分館長  
 櫻木強分館情報サービス係長
5. 26~27 平成10年度国立大学附属図書館事務部課長会議(於:東京医科歯科大学)  
 山本久事務部長  
 中野美智子情報サービス課長
6. 23~26 第45回国立大学図書館協議会総会(於:鹿児島市民文化ホール)  
 寺田弘館長 山本久事務部長  
 安永勉情報管理課長

10. 5 徳島県大学図書館協会定期総会(於:鳴門教育大学)  
 寺田弘館長 山本久事務部長  
 中野美智子情報サービス課長  
 上田智一専門員
10. 13 ~ 14 平成10年度国立大学附属図書館協議会中国・四国地区協議会実務者会議(於:愛媛大学)  
 吉田敬治情報サービス係長
10. 22 ~ 23 第34回日本医学図書館協会中国・四国地区部会総会(於:香川医科大学)  
 折原善彦分館資料情報係長
10. 28 ~ 30 第39回中国・四国地区大学図書館研究会(於:島根大学)  
 前田朋彦

## 研 修



8. 6~7 平成10年度ILLシステム地域講習会(徳島大学)  
 笹賀瑞枝 相原美恵子 真鍋佳子

10. 26 ~ 28 平成10年度徳島地区国立学校主任研修(徳島大学)  
 原田直樹

## 編集後記



本号では、巻頭で総合情報処理センター長大恵先生から「200X年の図書館」として電子図書館システムについて寄稿していただきました。その中で本学の電子図書館への本格的な取組の立ち後れを指摘され、図書館に積極的な協力をおしまないとコメントされています。このお言葉をはげみに、図書館として先生の描かれたような21世紀のキャンパスライフの実現をめざしていききたいと思います。

マルチメディア・プラザの利用について大学院生

の新谷さんに感想を寄せていただきました。マルチメディア・プラザはオープン後、半年が経過し、連日文献検索等に大勢の学生さんたちが利用し喜ばれております。これからも他の利用者に迷惑をかけないよう積極的にご利用ください。今年度中には蔵本分館にも端末機10台を備えたマルチメディア・コーナーが整備されます。

(T. U.)

徳島大学附属図書館報「すだち」No.60  
 1998年11月30日  
 編集館報編集委員会  
 発行 徳島大学附属図書館

<表紙デザイン・レイアウト> 清水 國 夫  
 〒770-8507 徳島市南常三島町2丁目1番地  
 TEL(0886)56-7584  
 FAX(0886)56-9016

